

東北漫歩

(宮城縣の卷) (三)

和泉生

我々は旅先などで、山の麓や谷の底、或は野の中や、岬の先などにある一軒屋を見出して、よくも、こんな獨りぼつちの生活が出来るものだと思ふことがある。然し、かうした一軒屋とても、何町か先の隣家と往來してゐるし、其の子女は、學校にも通つてゐる。また、自己の生産物を「まぢ」に賣りに行き、日用品を買つて來たりしては、生活を續けてゐるのである。このやうに、案外密接に他と結ばれてゐるのは、一體何によつてあらうか。それは道路である。道路による媒介こそ、さうした一軒屋を有機的な、社會的關係の一環たらしめてゐる最も根本的な基底なのだ。況や、「まぢ」に住み、「都會」に居る者は、家庭から一歩外へ出れば、一にも二にも道路の世話になることは、日々

の生活を一寸反省すれば、誰にでも、容易に了解され得る明白な事實である。尤も、交通路には、他にも鐵道や水路もあるが、これらの利用は、寧ろ特殊の場合であり、而もそれらは、道路による培養を受けずには存立し得ないのである。また、電車やバスは、道路交通の一部と言へるし、トラツク・自動車・リヤカー・荷車等の利用も、道路への依存なしには考へ得ることではない。

かくて、道路こそ、我々の社會生活に於ける最も重要な紐帯であり、動脈であると斷言し得るのである。されば、よりよき道路への依存は、我々各自の個人的生活の能率を高めるばかりでなく、必然的に一部落、一地方の社會的結合を固くし、經濟的活動を圓滑にするのである。これを、

國家を單位として考へても同様であつて、古代のローマ帝國、現代のアメリカ合衆國やドイツを引例するまでもなく、明治以來の本邦の産業躍進と國運隆昌が、道路の改修整備に負ふ所大であつたことは、常に指摘される所である。仙鹽道路の鋪裝や、松鹽道路の開設が、如何に大なる恩惠を與へつゝあるかと言ふ手近の小例を以てしても、全國の一般を推量し得るのである。されば、其の質と程度に、地域的相違はあるにしても、都鄙を問はず、如何なる人も、道路から受ける恩惠が、過去より現在の方が多くなつてゐる事實を、必ずや肯定せずには居られないであらう。此の點に於て、道路の不完全が、其の政治的統一と、産業の發達を妨げる一因となつてゐると言ふ支那に對比して、我々の幸福を痛感せざるを得ないのである。

然るに、空氣や太陽に對すると同じく、道路の重要性や恩惠は、屢々忘れられがちである。殊に、我々日本人に於てそれが甚しく、従つて、道路を愛護すると言ふ精神が一般に缺除してゐることは、正に三等國民以下である。然し、

これを以て、日本人の公德心其物が三等國民以下であると、速斷するのは安當でなく、寧ろ、訓練の不足こそ、其の主因を爲すものと考へられるのである。此の意味に於て、先般第一回の道路愛護日が、本縣に於て實施されたことは、鈇後の協同一致と、能率増進が緊要事たる時局に鑑みても、また、道路の愛護とその一層の整備が、東北振興の恒久的達成のための不可欠の一基底となすべき事實からしても、誠に時宜を得たものであつた。されば、望むらくは、これを一回だけで打切ることなく、是非今後も、市町村や民間諸團體、或は諸學校と緊密な連絡をとつて、繼續的に實施せられ、縣民訓練に努めて頂きたいものである。唯、それは最初から作業主義にのみ偏することなく、先ず道路の重要性、特に、其の愛護の時局的意義の認識を徹底させることに努めつゝ、漸進主義で進みたい。さうすれば、一般縣民は、それを愛護することによつて、より多くの恩惠を道路から受け得ることを實際に知り、遂には、所屬の如何を問はず、總てを「我等の道路」として、自發的に清掃、

小修理、或は側溝の浚渫など、所要の作業奉仕を爲して當局に協力し、其の愛護の實を擧げて、銃後の守りと、郷土の振興との貫徹達成に寄與するに至るべきことを、固く信するのである。

是は、嘗て道路保護協會の小論文募集に、一等當選の榮譽を獲得した高橋敬一氏の、「道路の恩恵と其の愛護」であるが、其の燃ゆるが如き雄叫びは、我等の胸を強く衝くと同時に、縣當局の撓まざる縣民への指導を、鞭打つものはなからうか。

また、兒童作品中、百を突破する入選作は、何れも涙ぐましい童心の赤誠が溢れ、思はず險の潤むを覺える。黒川郡落合小學校六年生、江本昭孔君の珍題、「魚屋さん」は、一風變つてゐるので、原文のまま載せてみたい。

「僕の家のまはりには、緑色の麥畑が波うつてゐる。麥の中にはいると、首までかくれてしまふ。この中に、上り坂になつた道がついてゐて、私の家に用があつてくる人は、誰でも通らなければならぬ道路だ。

この道の右側に、馬車馬に島の中のを食はれないやうに土手がきづいてある。或日私は、妹をおぶつてこの上に立つてゐた。すると、坂のすつと前方から、にこつた音が近づいてきた。それは、「ゴト〜」といふひびきであつたが、道がまがつてゐるのでよく見えない。

「何だか来たぞ。」といつて、僕は背中の中の妹をゆすり上げて、妹のせいを高くしてやつた。

上つてきたのは、五十ばかりになる魚屋であつた。

自轉車をひつぱりながら、でこぼこ坂をのぼつてくる。

僕の家へ来たにちがひない。びつくりするほど汗をかいてゐた。僕の前を通る時、へんなにほひがした。

ねえさんが家にゐる筈だから、きつと買ふにちがひないと思つて、僕は魚屋のあとについてのぞいてみたが、何魚だか、ふだがしてあるのでよく分らなかつたが、いわしでもあらうかと思つた。

「あまじほの上等ですよ。」魚屋はわらでつないだにしんをぶらさげてみせた。

「にしんばかりすか、なんぼつしや。」
「にしんばかりすか。いくらです。」
（の仙臺辯）

「六十錢」魚屋は力を入れていつた。

ねえさんは、高いとみえて顔をしかめた。二人してならんでみると、魚屋の方がせいが低い。「まげられえんか。」

魚屋はまけない。それでも、買つてもらへないと困るので、おかしなことをいつてねえさんをわらはせる。そして、僕の方を見ながら、手ぬぐひで首のあたりをふいてゐる。

「相川で昨日八匹で五十錢にうつてゐすたよ。」と、ねえさんは二たばのにしんを互にくらべながらいつた。うまいことをいつたなど、僕は心の中で思つた。同じものを六十錢でうるなんておかしい。

すると、魚屋は笑ひながら、「ハハハハ。そうは出来ませんや。相川からこまでくるのに、自轉車はこの通り泥だらけでな。」

タイヤにもスポークにも、ちぎ今ついたばかりの赤い泥が一ぱいくつついてゐる。僕はすぐ、魚屋さんのいふこと

が分つた。

「ぬかるのなんのつて話になりませんや。自轉車が動けなくてね。朝からまだ一箱賣つとらん。高くなるのはあたりまへですよ。」

その通りだと思ふ。もし道路が悪くて、一箱全部うれなかつたら損をするだらう。

ねえさんは、二たばかつて一圓二十錢はらつた。魚屋は、さつきの手ぬぐひをひろげて、パタパタふつて、「汗でこの通りですよ。」ところが、あまりきたない手ぬぐひなので、おかしくなつてわらつてしまつた。

次の日、學校へ行く途中坂を下つた。べちゃ／＼の坂道であり、でこぼこの坂道であつた。この坂道は、上つたり下つたりして學校までつゞいてゐるのだが、どこもかしこも、雨のためにぬかつて、靴のうらについてくる。

こんなに道が悪かつたかなあ、こういふふうに道が悪くて、物が高くなるのかなあと、つく／＼感じた。」

戸塚九一郎氏の北海道廳轉出に伴つて、徳島縣より榮轉

した清水良策氏は、加賀の國七尾町の人。腹の傑物であり、屈托のない明朗さは、誰もが心服し、敬慕する所である。

スポーツで鍛へ上げた健康そのもの、體軀に接する時、此の人ならばと、萬腔の信頼が滾々と湧き、此の人の爲には、水火も厭はぬ熱烈な心情が動く。兎角、人間は立身出世をすると、無闇矢鱈に威張り散らし、其の態度も頗る横柄となるのが通弊であるが、清水氏には、斯る不評が微塵もない。上に諂ふことなく、而かも、下を蔑むことをしない。身は一國の主とも、盡す者への思遣りは人幾倍で、其の和らぎのある風貌には、自づと跪かざるを得ないのである。

嘗ては、内務省港灣課長或は道路課長として、思ふ存分其の俊敏を發揮し、殊に、部下に對する溫厚と親情は、到底他の追従を許さぬものがあつた。それだけに、靜岡縣内務部長の椅子は、甚だ不似合ひのものであり、衷心の毒千萬であつたが、間もなく、和歌山縣知事への跳躍は、當然過ぎることゝは言ひ、一日千秋の思ひで待ち焦れた宿願であつた。和歌山縣に在ること二年五箇月。遂に、望まれ

て滿州國へ雄飛されたことは、其の人爲を遺憾なく物語るものであらう。

昭和十一年六月十二日、德島縣知事を拜命後は、滿州國仕込みの凄腕に燃りを掛け、縣行政の各般に亘り、目醒しい躍進と、斷乎たる改革を敢行し、其の功績顯著なるものがあつた。然し、依然として、德島縣知事としての足踏は、靜岡縣内務部長時代と同様に、悲しい齒痒さで一杯であつたが、昨年九月、東北の重鎮たる宮城縣への進出は、期待と希望に彩られた輝しい感激と歡喜とを齎し、東北地方の一大伸展と向上が豫約された。赴任後未だ半年にも満たないが、膝元は勿論、東北地方に漲る激刺たる生氣は、最早否定出来ない。紅蓮の焰と燃え盛つた東北振興土木事業の呼聲は、事變の波に掩はれて、僅か三箇年の短日月を以て鬱く没し、敗慘の喘ぎを喫しつゝある。東北振興土木事業の復活こそ、東北地方更生の活路であり、銃後の護りの搖がぬ保證でもある。東北地方が他府縣に比して、十年も遅れてゐるとのゴシツアの種は、もう一笑に附すべき時機で

もなからう。大地を力強く蹴つて立上る黎明期が、頭上に迫つてゐるのである。此の好機に際し、東北地方の官民一丸となつて歩調を合せ、道路・河川・港灣を通じて、其處に、一大貢獻の端緒を求め、世人をアツと驚嘆せしむべきである。他府縣人の及ばぬ純情性と強靱性を、唯一の武器として突進せば、如何なる難事と雖も、悠々達成し得るであらう。

腹の人清水長官よ。曙光に浮ばんとする東北振興の天使として、善き指導とふんだんの盡力を冀ふ。

豪勇そのものゝ前土木部長大石巖氏も、靜岡縣に聳入りしてから、すつかり好々爺に收まり、酒豪大石として鳴らした昔日の面影が薄い。彼の仙臺時代には、數度宴席で會し、十八番の都々逸をタンマリ聞かされたこともあつた。音聲は言はぬが華だらうが、鏘の佳さには、苦勞人らしい一片が伺はれる。昨夏、彼の地へ旅行したとき、得意の都々逸を樂みにしてゐたが、惜もくも機會を外してしまつた。聞きたい時には聞けぬものである。

大石氏の跡を追つた飯島馨之助氏は、愛ぐるしい坊ぢやん型で、看板通り氣立ての優しい部長さんだが、あれで仲々の頑張り屋であり、親分肌の氣性は、大石氏に優るとも劣らぬ位だ。多分昭和三年の暮であつたらう、不眠不休で災害工事に苦勞した課員や出張所員に、特別賞與を出すことで尠からず採めたことがあつた。無論、此の問題を提出したのは、當時鳥取縣土木課長の飯島氏であつたことは言ふまでもない。要求額は、ほんの心ばかりのものであつたが、上層部は頑として容れやうとはしなかつた。それでも、折衝は幾回となく繰返へされ、漸く麗しい眞情に凱歌が擧つたものゝ、其の額たるや實に些細のものであつた。もう正月が来る。旨い雑煮の一つも餘計に喰べさせたい親心から、彼は自分の賞與に幾何かを足前して、これを各出張所に届けたと云ふ。數で割れば、一人當りいくらにもなるまい。然し、其の心根は美しく尊い。

土木縣としての岡山は良い。さりとて、宮城縣も亦見捨てたものでもなからう。爲すべき道路工事が山と積まれて

ある。國道は國に委せたとしても、重要府縣道の改良はこれからだ。仄聞すれば、鹽釜町と石巻市との鋪裝化を計畫中とのことだが、これは恐らく多年の懸案であつたらうし、宮城縣の地位から見ても、現下の急務であることは、疑ふ餘地があるまい。此の莫大な費用の拮出は、嘸かし頭痛の種であらうが、國庫補助のみを當てにしては、固い決心が鈍る。速に、繼續事業としての大計畫を樹立し、是が貫徹に一路邁進されたい。

やつてとせがめば、百面相もやつて退ける器用無類の道路課長鈴木邦彦氏は、太つ腹の捌きにいゝ啣みがある。仕事にも熱心だし、下僚のウケも羨しい程よい。然し、下僚を信賴し過ぎる嫌ひがないでもない。信賴することは、長たる者の美點であり、上下融和の秘訣であるが、活のある融和こそ、一層望ましいものである。活。皮肉の様な一言であるが、曲解されては辛い。將來の大成を約される人なるが故の進言であり、其の實現を心から希ふが故の祈りである。

道路主事鈴木正助氏の懸命の勉強振りは、相當調子が出て來たものゝ、まだ一頭張らねば、箔が附かない。各府縣の土木部には、腕利きの道路主事が綺羅星の如く居列び、所管道路行政への盡瘁は、頼母しい限りである。然し、其の人達は何れも股肱の補助者を有するが、鈴木氏はそれに恵まれない。當ては、若手の錚々たるところが數人居たが、何時しか、他の課に引抜かれて後の祭だ。殊に法規通の上原君を手放したことは、不要心も甚だ敷いと、口惜しくなる。下學して上達すべき鈴木氏が、其の的を失つては、落膽するのも無理とは言へまい。否、鈴木氏のみ悲哀でなく、土木部全體の損失である。

上原君が晴に歸るまでは、鈴木氏もさぞかし孤軍奮闘であらうが、

飛び込んだ力で浮ぶ蛙かな
の心構へは、やがて芽をふく春の訪れとなるであらう。

東北六縣の土木部課長が、揃ひも揃つて粒選りであるこ

とは、またとない心強さであり、其の使命の重大性に鑑みても、斯くあるべきが天の配劑とでも言ふのだらう。

どの顔を見廻しても、職務に殉ずるの覺悟があり／＼と映り、其の態度や行動に於ても、萬難克服の氣魄が漂ふ。

彼等の中には、東北を輕蔑し、嫌忌してゐた者もあつたに相違ない。然し、一度東北の土を踏んだ瞬間、東北に對するこれまでの認識を是正し、やり甲斐があり、働き甲斐がある、内心北叟笑むだことだらう。

年中工事の能ふ府縣は幸福である。氣象に恵まれぬ該地方は、白魔の荒れ狂ふ半年に泣かされる。嘗て執行された救濟土小事業の年度内竣功には、言語に絶する辛酸と、血の滲むやうな苦闘を續けたらしい。數年前の晩春だつたらう。秋田縣へ旅行した折、其の眞相を某所長から洩され、ホロリとさせられたこともある。そうした尊い體驗を有するが故に、昭和十一年度以降に於ける府縣道改良工事も、政府助成の趣旨に副ひ、所期の効果を收めつゝあることは、唯一筋の奉公氣質をより堅實ならしめるものであり、積年

のスローモーの汚名を、さつぱりと清算するものであることを確信する。二言目には、スローモーと嗤はれた東北も、もはや立派に一本立ちとなり、鮮かに他府縣を見返すやうになつた。

暖國の或縣杯では、補助府縣道の工事着手が、其の年の十一月を過ぎるものもある。諒へ、從來のシキタリがさうであつても、ノホ、ンを極め込むことは、不埒千萬も甚しい。土木課長たるものゝ能力が疑はしくなり、其の恥ずべき態度を憎みたくなる。そんな課長に、東北の躍動する意氣込と熱血を御覽に入れたいものだ。

時局は愈々重大を示し、地方豫算の編成に一段の難澁を加ふるの秋、兎角、道路費の削減は論議の中心となり、動ともすれば、道路費危しの聲を耳にする。然し乍ら、東北各縣の昭和十五年度道路費豫算が、遙かに前年度豫算を凌駕し、不動の巨歩を刻した善果は、唯々、感慨無量の一言に盡きる。

離れまいと固く契つた六つの力を見よ。

東北地方を思ふ遊りが、ガラにもなく東北散歩と洒落る動機となつた。何とかして、東北の特異性を紹介し、寸毫たりとも、其の進展に寄與したいとの企圖は、ずつと以前からのことではあつたが、何分素養の乏しい私である。身の程知らぬと蔭指さされてまで、ペンを握る必要もなからうと、思案に思案を重ねつゝ、心ならずも川端柳の幾月かを暮してしまつた。私は絶えずハズミを求めた。勇氣附けて呉れるハズミを……

芭蕉や西行が求めた風流の旅や、探幽・廣重の繪畫の旅、或は、黃門様が辿つた民情視察の旅は、何れも旅らしい面白さ、愉快さが多分に盛られ、嚙みしめれば嚙みしめるほど、其處には人生の修養があり、處世の道が示され、または、敬神崇祖の觀念を助長するものであるが、丸一年を費した私の長い旅は、文字通りの漫歩であつて、右の一つにも當敵らない空虚なものであり、綴方教室にも貼り出せない未熟なものであることを恥じてゐる。然し、目的が

其の衝に當る者への希望を主體としたものである以上、其の出來上りの拙劣も亦己むを得なかつたのではなからうか。私としては、もつと良心的なものを纏め、せめて、東北の横顔を收め得るものにしたかつた計畫も、種々の事情で、遂に畫餅に歸してしまつたが、何時かは、光の角度から觀た東北、影の角度から覗いた東北の生々しい姿を、延々とした心境で寫してみたいと思つてゐる。

冬 春 抄 句

伐り倒す蘆山の松や冬の月
陣營に冴ゆる灯影や母の文
禿頭の無帽に冬の日脚かな
焚火消して敵火避けつゝ冬野道
尼寺に人寄る小春日和かな
沈む日に鳥暗れかゝる沙千人
野遊びに道まどひけり白き蝶

巴 藤